

小鳥の歌 この方こそ

小鳥の歌 村に町に告げ知らせる

良い知らせを

「この世の罪 その身に負うために

生まれ給うた

この方こそ 世の救い主」と (新聖歌 94・鳥の歌)

バスの中で本を読んでいる、物言わぬ子供とその子を受け持った心優しい先生の話だと思って読んでいると、急に戦時中の拷問の話が出てきて、虫けら以下に扱われた朝鮮人が赤い絵の具のついたジャガイモみたいになって黙って死んでいった場面に胸が凍りついて、その時、イエス様が十字架について死なれた意味が少しだけ分かったような気がした。

「今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう」と罵る人々の声を聞きながら、イエス様は、決して十字架から降りなかった。嵐を静め、悪霊を追い出し、死人を生き返らせるイエス様にとって十字架から飛び降りるなどいともたやすいことだった。でも降りなかった。飛び降りる姿をみて拍手喝采、「信じます、信じます」と騒ぎ立つ多くの人の救い主ではなく、苦しみ抜いて死んでいくたった一人の救い主になるために、イエス様は十字架の上に放置されることを選ばれた。

私の救い主とはこのようなお方なのだと胸が熱くなって、イエス様というお方が何とも誇らしくなって、ああ私も小鳥になって村に町に告げ知らせたいと

思った。

「この方こそ 世の救い主」と。

「この方こそ 世の救い主」と、イエス・キリストを喜び祝うために、私たちは毎週毎週集まって、共に聖書を読み、賛美歌を歌い、心を合わせて祈る。

集会の度に、私たちはこのお方によって救われたのだと、この世にあってすでに永遠の世界に生かされているのだという平安と喜びに包まれる。集う私たち一人一人がどんなに欠けの多い未熟な者であっても、神様の恵みはそんなことによって制限されたりはしない。主の名によって集まる所には、主ご自身が共にいてくださって、人間の側の善し悪しを問うことなく、惜しみなく恵みを注いでくださる。そこに集う一人一人は、ただ低くなって、その恵みを全身に浴びれば良いのである。

「この方こそ 世の救い主」と、味わい知る御言葉は、聖書の中にあふれている。

今日の主日礼拝では、ヘブライ人への手紙7章11節から28節までを学んだ。こんな難しそうなところも、これが聖霊の助けというのだろう、ギリシャ語もヘブル語も読めない私たちでも、聖書を繰り返し読み、担当者の説明を聞き「オオッ」と感動するほどよくわかる思いがした。

「主は誓い、思い返されることはない。『わたしの言葉に従って、あなたはとこしえの祭司、メルキゼデク』詩編110:4

ヘブライ人への手紙では、イエスこそ神と人との間にあってとりなしをする(メルキゼデクに等しい)真の祭司であると論証する。イエス様が来られるまでの旧約時代、祭司の務めはレビ族であるアロンの家系によって継承されたが、

その人たちも死ぬのであるから、次々と多くの祭司が任命された。そしてその祭司たちはまず自分の罪、次に民の罪のために、毎日動物をいけにえとしてさげねばならなかった。しかしイエス様はただ一度、民の罪を償う供え物として御自身を献げてくださった。その時から、罪のために動物を献げるという律法から解放されて、キリストによる完全な救いの道が開かれたのである。復活されて天におられるイエス様は今も「常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります」とある。

そして、この手紙の筆者は「このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。」と続けている。

ここが、旧約聖書を持たない日本人には分かりにくいのではないかと思う。神様がおられるというのはわかる。しかし、人は神に赦されねばならず、その赦しのために、神と人との間に立って執り成しをしてくださるお方が必要なのだと、いくら説明されてもすぐに納得できるものではないだろう。

ある人が「聖書を読んで、自分が贖われなければならない（罪のつぐないの必要な）存在だと知って、衝撃を受けた」と言っておられたが、神様との交流を持つためには、私たちは贖われなければならないのだと聖書は告げる。人間は神様によって造られているので、神様との生きた交流なしには、真の平安も喜びも与えられない。そんな当然なことに気づき、自分の空虚に気づき、悪しき思いに気づき、こんな自分をどうにかしていただきたいと嘆き呻くときはじめて、人は、罪を償ってくださるお方を切望するようになるのだろう。

そのような者のために、イエス様は今も「常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うこと

がおできになります」とある。

この恵の御言葉を何の疑う必要があるろう。私たちが何かを為して救われるのではない。救われる値打ちがあるから救われるのでもない。清くも正しくもない、愛と真実の片鱗もない、このままでは滅びる他ない者を救うためにこの世に生まれてくださり、ご自身の命を献げて神様に執り成してくださるイエス様、「この方こそ 世の救い主」と信じすがって、人はみな救われるのである。

道に迷った人には「羊飼い」となり、渴く人には「いのちの水」となり、暗闇に泣く人には「光」となり、孤独な人の「友」となり、愛なき人の「愛」となり、希望なき者の「希望」となってくれるイエス様。

雪の舞う日も、芽吹く木々がもうすぐ春だと告げる日も、「この方こそ 世の救い主」と、さあみな共に、小鳥のように歌い続けよう。